

遠山慶一氏寄贈の「遠山甚二郎旗指物」について

上原 康生

本稿では、平成22年度に本学校友の遠山慶一氏より当館に寄贈された「遠山甚二郎旗指物」(【写真①】)を紹介する。寄贈者の遠山慶一氏は、伊予松山藩に8代にわたって用人として仕えた遠山家の末裔であり、これまで度々当館に資料をご寄贈頂いているが、本資料は旗指物1流で、赤地に金箔文字を刺繍して「遠山ちん二郎(じんじろう、甚二郎の意)」と記されている。法量は、縦101.3cm、幅66.7cmである。



【写真①】 遠山慶一氏寄贈「遠山甚二郎旗指物」

旗指物とは、戦国～織豊期にかけて、大名の軍勢が敵味方を見分け、また武功を記録するために背面に指した目印旗であり、戦国期に戦争が大規模化、集団戦化するとともに発展した。形状としては、正方形の四方や、縦3、横2の割合の大きさの四半が多く用いられ、本資料は四半に該当する。本資料の所用者である遠山甚

二郎の仕えた井伊家は、「井伊の赤備え」として知られているように、藩主をはじめとして士卒に至るまで、武具や旗指物などを朱色で統一していた。一般に旗指物には、家紋、神仏の名号やその略号、霊獣・霊鳥、瑞祥文、動植物文、格言、使用者の姓名などが記され、そのうち、姓名を記したのものには、同姓一族を見分けるために通称やあだ名をひらがなで記したものがある。井伊家の場合、赤備えの軍備はデザインや寸法が細かく規定されており、遠山甚二郎のような騎馬武者(知行取藩士)の旗指物は、朱地に金でそれぞれの名を記すのを基本形としていた。なお、本資料に類似するものが井伊家の居城であった彦根城博物館に収蔵されている。

所用者の遠山甚二郎は、元和元年(1615)の大坂夏の陣において活躍したことが史料から確認できるが、その前に、遠山甚二郎および寄贈者の遠山慶一氏の祖先に当たる美濃遠山氏について触れておきたい。

遠山氏の祖とされるのは、鎌倉前期に幕府の御家人として活躍した加藤次景廉である。景廉は源頼朝から美濃国遠山荘(現岐阜県恵那市・中津川市等周辺)地頭職を拝領した。遠山氏は、その子景朝がこれを相続して同荘に住し、遠山を称したことに始まる。その後、同氏は、景朝の嫡男景村の恵北家(苗木氏)、二男景重の明知家、三男景員の岩村家に分流するが、そのうち、恵那郡南半の南部を所領としたと推定されている明知家が宗家になると考えられている。なお、寄贈者や遠山甚二郎はこの明知家の系統であることが寄贈者宅に伝わる系図(以下、「系図」と記載)から確認できる。

その後、戦国期に明知遠山氏は織田信長の麾下に入り、子孫は江戸時代には旗本となって明治期まで存続している。「系図」によると、寄贈者や遠山甚二郎の祖先に当たるのが明知家12代景行の弟景恒かげつねである。景恒は信長の手に属して桶狭間の戦いで功を上げるなどしたが、後年同吏と争論におよんで同吏を討ち、関東に退い

たという。その後、景恒^{かげのぶ}の子景運^{かげのぶ}が天正年間(1573～1592)に下総国小南^{こみなみ}(現千葉県香取郡東庄町)において松平(久松)定勝に仕え、伊勢国桑名に所領を拝領した。そして、景運の子が遠山甚二郎、および寄贈者の先祖である伊予松山藩士^{かげとし}景利である。

次に、遠山甚二郎およびその子孫について述べる。

遠山甚二郎は、徳川家の重臣で彦根藩初代藩主の井伊直政に仕え、慶長12年(1607)付の井伊家中の分限帳に、知行高150石の者として「遠山甚次郎」の名が確認できる(「未之年御家中分限帳」(『井伊年譜』(『新修彦根市史 第6巻史料編 近世1』2002年)))。先述したように、甚二郎は大坂夏の陣で活躍したことが確認できる。

大坂夏の陣の戦いの一つである元和元年5月6日の若江合戦において、甚二郎の仕える井伊直孝の部隊は、木村重成隊を破り、敵将木村重成を含む300余の者を討ち取る功を上げたと言われる。この功により、大坂の陣後、井伊家は元和元年、同3年(1617)、同10年(1624)に各5万石ずつ加増され、譜代大名の中で最大となる30万石を領有するに至った。このように、若江合戦は井伊家飛躍のきっかけとなった戦いと言える。この戦いに参陣した甚二郎は、井伊隊の先手を務めた川手主水の組に属し、主水を討った平塚熊之助を討ち取る功を上げたが、甚二郎自身もこの戦いで討死している(『大坂御陣覚書』(『大日本史料』第12編第18冊1055、1056、1059頁))。

『井伊家文書』内に、大坂の陣の戦死者のうち、慶安3年(1650)12月8日段階で井伊家中に子孫がなく断絶した者たちが記されており、その中に「遠山甚次郎」の名が見える。そして、その跡は「子甚二郎」が相続したが、彼の病死後子がなく、断絶したとある(『井伊家文書』(『大日本史料』第12編第18冊964、965頁))。しかし、「系図」によると、甚二郎討死後、実際にはその弟(甚二郎。景運四男)が養子となって跡を相続したようである。具体的な時期は不詳だが、甚二郎(景運四男)は実父景運より先に亡くなったらしい。「系図」によると、景運が亡くなったのは寛永12年(1635)4月11日のことであるので、これに従うと、これ以前に甚二郎は病

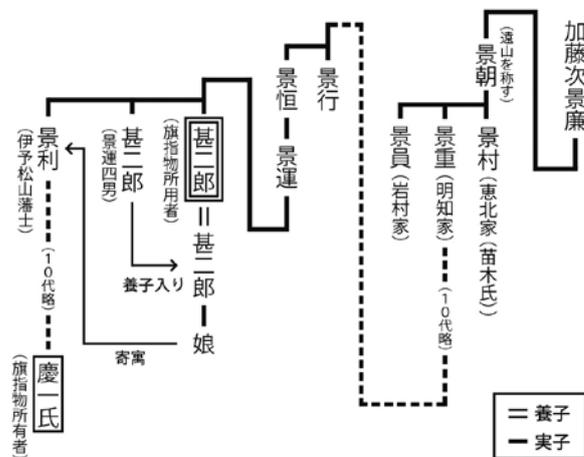
没したことになる。なお、「系図」によると、甚二郎(景運四男)には娘がおり、父の病没後に伊予国松山に移り、親類である遠山新八景利の家に寄寓し、そのまま嫁がずに同家で没したらしい。このような関係から寄贈者の家に本資料が伝わることとなったのである。

以上の経緯から明らかなように、本資料は織豊～近世初期に活躍した武将の装備品として象徴的な品物である。当館では、寄贈時に見られた断裂と劣化部分を裏打ちし、展示に耐える修理を行った。今後、博物館で展示公開をしたい。

最後になりましたが、本資料をご寄贈頂き、また、「系図」等の資料についてもご教示を頂いた遠山慶一氏に心から御礼を申し上げます。

〈主な参考文献〉

- 網野善彦「加藤遠山系図について」(小川信編『中世古文書の世界』吉川弘文館 1991年)
- 加藤鐵雄『戦国武将「旗指物」大鑑』えにし書房 2016年
- 『国史大辞典 第6巻(こま～しと)』吉川弘文館 1985年、「指物」の項目
- サントリー美術館編『井伊家伝来の名宝 近世大名の文と武』サントリー美術館 1999年
- 竹村直美「研究ノート 若江合戦図について」(『彦根城博物館研究紀要』第1号 1988年)
- 『枚岡市史 第1巻 本編』1967年
- 彦根城博物館編『“ほんもの”との出会い 井伊家伝来の名宝1「井伊家と彦根藩」』彦根城博物館 2009年
- 彦根城博物館編『“ほんもの”との出会い 井伊家伝来の名宝2「武器と武具」』彦根城博物館 2009年
- 横山住雄『中世美濃遠山氏とその一族』岩田書院 2017年



【参考図①】遠山氏略系図
(〔横山 2017年〕及び「系図」を基に作成)

関西大学博物館学芸員